



# 新妻がセーラー服に 着替える刻

～義父の牝奴隷～

松平龍樹

挿絵／黒石りんご

立ち読み版

KTC  
KILL TIME COMMUNICATION



第1章	義母 <sup>おかあさま</sup> の遺産 <sup>形見</sup> ……………	4
第2章	絶頂 <sup>イキ</sup> 痴獄 <sup>ちごく</sup> ……………	89
第3章	セーラー服に着替えさせられて……………	176
第4章	生き甲斐……………	287

## 登場人物

Characters

### めぐみ

(めぐみ)

二十二歳の人妻。中学生と見間違ふような若い容貌とは裏腹に、Fカップの巨乳を持つため、頻繁に痴漢に遭う。大学を卒業して早々に庸介と結婚した。

### 義介

(ぎすけ)

庸介の父であり、めぐみの義父。一代で財を成した資産家。五十過ぎとは思えぬ若々しさを保つ。めぐみたちと同じ家に住んでいる。

### 庸介

(ようすけ)

めぐみの夫。二十代前半の好青年。



12個のパールローターの振動が、めぐみの官能を燃え上がるだけ燃え上がらせ、めぐみの肉体カラダだけでなく、意識までも覆い尽くしていた。

ヴヴヴヴヴヴヴ。

新たな振動音が響いた。義介が、手に持ったマッサージャーのスイッチを入れたのだ。

(あああ……ッ♡)

めぐみは、黒く巨おおきな瞳を蕩かせながら、熱いため息を漏らした。

「いくよ、めぐみサン」

(は……ッ、はひ……ッ。いらしてください……ッ、御義父様おとうさまあ……ッ♡)

めぐみは、涙ながらにこくつとうなずいた。

息子の嫁が初めて見せる積極的な意志の表明に、義介は微笑む。

「良いコだ。良いコだ。めぐみサンは本当に良いコだ」

義介は片方の手で三個のパールローターが振動している乳首の上から乳房を揉みこみ、やわッ、やわわわわッ、ヴッ、ヴヴヴッ。

「あグ……ッ、うぐぐぐ……ッ」

もう一方の手で、もう一方の乳首に振動しながら取りついている三個のパールローター上から、マッサージャーを振動させながら押しつけた。

ヴィヴィヴィイイインンツ。

ががががツツ、ぎゅぎゅぎゅぎゅツツ。

「おぐ……ッ！ あががが……ッ！」

めぐみのまぶたの裏で火花が爆ぜる。

それほどまでに強烈な刺激、快感だった。

ががががッ！ ヴユツ、ヴユヴユヴユヴユツ。

「ぐウウ……ッ！ ごほをおお……ッ！」

乳房だけでなく、肋骨、骨組みそのものが震わされて、めぐみの歯の根が合わなくなっていく。

ぐがががッ！ ヴイツ、ヴィヴィヴィインンムツ！

「あは……ッ！ むぐう……ッ！」

身体の芯まで揺さぶりあげられながら、めぐみは自分の肉体が奥からトロトロと、トロトロと溶け出していくのを感じていた。

ひくん、ひくんツ、と内腿が、いいやその間にある狭間、ぱっくりと口を開いた

秘裂クレバス、腔腔ヴァギナ、肉褻がのたうつ。

どろどろどろりッッ。

(あああん……ッ♡)

粘っこい、白濁した滴が、めぐみの女の命、命の源泉から、こんこんと吐き出され、めぐみのお尻の穴までビトビトに濡らし、

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅッ。

(あはあ……ッ！)

鼠蹊部ばかりではなく、垂れ落ちたソファにたまって、めぐみのお尻全体を濡れ散らかしていた。

(あああ……ッ、あああ……ッ♡)

それは途方もない快感だった。

何もかもから解き放たれ、自ら分泌した粘液に入り浸びたるのは途方もない快感、ヨロコビだった。

ヴヴヴヴッ、ヴィヴィヴィンムッ。

(あ……ッ♡)

義父の義介が操るマッサージャーがめぐみの胸肌をなぞり、這いながら、滑りおり

てくる。

ぴくんッ、ぴくくくッ。

(アは……ッ、あひィ……ッ♡)

パールローターを三個ずつ取りつけられた乳首と肉芽クリトリスがさらに勃起していくのがわかる。

めぐみは、熱く火照る肌をさらに血走らせ、あちこちを痙攣させながら、溶け崩れんばかりに濡れ潤んだ肉体カラダだけでなく、心も開いた。

(いらして……ッ、いらしてくださヒ……ッ、御義父様おとうさま……ッ♡)

義介が操るマッサージャーはめぐみの、引き締まった腹部に刻まれた縦長の窪みくぼを這い、なぞり、

ヴィヴィヴユッ。ヴユヴユヴユムムッ。

(かは……ッ！　ぐふう……ッ！)

めぐみの滑らかな腹部だけでなく、胃袋、そして子宮までをも震わせた。

ヴヴヴヴヴヴッ。

その振動は、めぐみの膣奥、子宮口近くで振動している三個のパールローターと連動し、共鳴しあつて、めぐみを夢見心地にくれる。

(ああ……ッ、あああ……ッ♡)

本物の性行為、SEXに及んでいないと言うのに、めぐみの肉体カラダは発情しきつてしまい、完全に出来上がってしまった。

めぐみは自分の子宮口がばくばくと、パクパクと物欲しげに口を開いているのを自覚していた。

(……オンナって、オンナのカラダって、ホントウに欲しくなると、口を開いちやうのね……ッ♡)

(わたしって、わたしって……、こんなにイヤらしい女の子……、いいえオンナ……ッ、いいえ、『メス』、だったのね……ッ♡)

底知れぬ奈落に落ちていくような墮落感が、めぐみを心地よく酔わせてくれた♡

三個のパールローターを奥深く、子宮口近くに収納しためぐみの膣腔ヴァギナはばくばくと喘ぎビラキ、白濁した特濃花蜜マコシチュウをちゅくちゅく、どろどろと分泌していた。粘っこい愛液はめぐみの会陰部はもちろんのコト、排泄器官までをびとびとに濡らし、さらにめぐみが腰掛けているソファにたまって、大きく豊かな臀房までをどぼどぼに濡らしていた。

ぞくぞくぞくぞくッ。



めぐみはまるで、自分が分泌した愛液に腰まで漬かり、その粘液にちくちくツ、ちくちく溶かされていくような感覚を味わっていた。

めぐみはフルえ、懊悩した。

(あああ……ッ、あああ……ッ♡)

それは途方もなく素晴らしい快感だった。

(ああ……ッ、あああ……ッ♡)

(わ……ッ、わ……ッ、わたし……ッ！ わたち……ッ、ホントウにいったい、どうなッチャウの……ッ!!)

(こ……ッ、こ……ッ、こわヒ……ッ!)

自分自身の急激な変貌ぶりに、さすがに戸惑ヒ、涙を流す新妻の頬を舐めしやぶりながら、義介は両手を動かしながら囁きかける。

「良いコだ。良いコだ。めぐみサンは本当に良いコだよ」

そうして、義介は片方の手で三個のパールローターが振動している乳首の上から乳房を揉みこみし続けながら、振動しているマッサージャーをさらに下方へと動かす。

(——!)

めぐみが気づいた時には遅かった。

マッサージャーが、めぐみの最も鋭敏な部分、勃起している肉芽クワトロリスに取りついている三個のパールローターに触れた。

その瞬間だった。

ヴッ!!!

ばちッ!

めぐみのまぶたの裏から頭の中に向かって火花が飛んだ。

「あぐ……ッ!!」

めぐみは目を白黒させて悶絶してしまふ。

しかし、気絶出来たのも一瞬だった。次の瞬間、まったく同じ刺激、マッサージャーとパールローターから重なりあつて、もたらされる快感に引きずり起こされ、その激流というか、衝撃に呑み込まれてしまふ。

ヴィヴィヴィヴィヴィヴィツツ!!!

「ぎひひひひひひひひひひッツ!!!」

めぐみは白目を剥きながら、哭ないた。

泣くことでしか、この異常極まる快感、責め廻りに耐える手だてはなかった。

しかし、義介は容赦しない。

ヴィッ！ ヴィヴィヴィヴィイイイイ~~~~ンムムムムッッ!!!  
さらに、マッシャージャーを使う、めぐみの肉芽クリトリスを責め立てていく。

「ぎっひいいい~~~~ッッ!!! あがあああ~~~~ッ!!! をごおおお~~~~ッ!!!」

(やめてッ！ ヤメテッ！ 御義父様おとうサマ ああ~~~~ッ！ わたし……ッ、わたし……ッ！ ホントウに……ッ、ホントウに……ッ、狂っちゃいますう……ッ！ 死ぬ……ッ、死んぢやいますう……ッ！)

がくがくがくくッ、がくがくがくくッッ。

めぐみは本当に、『奥歯をガタガタいわせて』昇りつめてしまう。

次から次へと押し寄せてくる、絶頂オーガスムスの荒波にめぐみの意識は呑み込まれ、溺れ、溺死しそうになってしまう。

ヴィムッ！ ヴィヴィヴィヴィイイイイ~~~~ンムムムムッッ!!!

「をooooッッ!!! ぐうう~~~~ッ!!! ぐひッ！ ぎっひいいい~~~~ッ!!!」

めぐみは奇声を上げてのたうち、哭いた。

(死む……ッ、私、ホントウに死んぢやううう……ッ！)

がくがくがくくッ、がくがくがくがカッ！

肉芽クワトリスがぼんぼんに腫れ上がって痛い。

まるで身体中の血液がソコに集まっているみたいだった。

そんな、今にも爆発しちやいそうなまでに充血し、膨れ上がった感覚器官を三個のパールローターに三方から挟みつけられ、揺さぶりあげられ、

ヴィヴィヴィヴィヴィイイイイイ〜ンムムムムッ!!

「あああああ……ッ！」

その上から、大きな振動機バイブレーター、肩などの筋肉をもみほぐす、大型のマッサージャーで震わされているのだ。

ヴヴヴヴヴヴヴッ!!!

「ぐぐぐぐぐッ！」

感じないはずがなかった。感じずにはおれなかった。

しかも、義介の行為は絶妙で、めぐみの性感、最も感じる所を的確に、時機を捕まえて責め廻り、さらに快感を高めていく。

ヴィッ、ヴィッヴィヴィヴィイイイイイ〜ムムムムッ!!

ぐつぐつ、ぐらぐら、頭の中が快感で煮え滾るタギ。

あまりの快感にめぐみは神経は過負荷状態になり、灼き切れかかってしまう。全身の肉という肉が痙攣し、身体中の血液が沸騰していた。

ぎちぎち、ぎちぎち。

骨が軋む。

快感と快感が共鳴しい、押し合いへしあいしながら、重なりあって、さらなる快感を呼び、めぐみの官能をさらに深く、重く刺激する。

ヴィンツ！ ヴィヴィヴィウムムツ！！

（あぐうう……ッ！ もう……ッ、もう……ッ、ダメええ……ッ！ わたし……ッ、

わたし……ッ、ダメに……ッ、ダメになっちゃううう……ッ！）

肉の敗北を認める新妻の脳裏、固く閉ざしたまぶたの裏に水平線が映った。

（……ッツ！！）

めぐみは息を呑んだ。

めぐみの脳裏に映る観念世界では、はるか彼方に白波が立ち、急速にこちらにやって来ようとしていた。それは現実世界では有り得ない、巨大な高波だった。

その快楽の津波は、天にも届かんばかりの飛沫を噴き上げながら、めぐみの方に急接近していた。

(……あッ！ あああ……ッ！ あああアああ……ッ！)

その巨大な荒波が何を意味するのか悟って、めぐみはこうべを振った。その高波に吞まれたら、『すべてが終わってしまふ』に違いなかった。

しかし、ソレをかわすコトも、避けるコトも出来なかつた。何より、めぐみ自身がその荒波に吞み込まれ、溺れ、破壊されてしまふコトを望んでいた。

ぶるッ、ぶるぶるぶるるるッ。

見る間に押し寄せてきた津波が、四方八方からめぐみを取り囲む。

空気が圧縮されたために、気圧が変化し、耳鳴りのような幻聴が聞こえる。

周囲の波頭がめぐみの頭の上をはるかに越し、空を覆い尽くしそうになっていた。そして――。

周囲の波頭が崩れ、めぐみの頭の上から覆いかぶさつて来た。

ぽごおおッ！

ヴィンツッ！ ヴィツヴィヴィヴィイイ~~~~ムムムムツツ！！

「あぎやあッ！」

めぐみは一声呻き、絶頂を極めてしまった。

ぶっしゅうううう~~~~ッッ！



「それじゃあ、いつものように誓いなさい」  
 ぴくッ。

シースルーのセーラー服を着て、自慰行為に耽っていた新妻の表情が動く。

「は……ッ、は……ッ、はヒ……ッ！ わ……ッ、わ……ッ、わかりました……ッ」  
 めぐみは影を落しながら、そう言うよりしかたなかった。

その誓いは、あのSM倶楽部の会員たちの前での宣誓とは別の、義介とめぐみ、二人っきりの間で交わされた、それ故ゆえに何よりも大事な、神聖な誓いだった。

「わ……ッ、わ……ッ、わたしは……ッ、御義父おとうさま様のメスイヌ奴隷である、めぐみはああ……ッ、夫、庸介を大切に……ッ、ないがしろにしません……ッ」

「それでおしまいかね？」  
 ふるふるッ。

絶対的な飼い主である、義父の義介の質問にめぐみは涙を千切りながらかぶりを振り、誓いを続けた。

「も……ッ、もし……ッ、もし……ッ、夫、庸介をぞんざいに扱……ッ、哀しませたり……ッ、不幸にしたなら……ッ、売り飛ばされても、か……ッ、か……ッ、構いません……ッ」



「よし、よし。そうだよ♡ よく言えたね」

義介が笑う。

「そのことをよく覚えていなさい。もし、庸介をぞんざいに扱ったり、哀しませたり、不幸にしたら、すぐに売り飛ばしてしまうからね♡」

「は……ッ、は……ッ、はヒ……ッ」

心します、とめぐみは涙ながらにうなずくしかなかった。

しかし、それでも胸中の慕情を抑えることは出来ない。

「う……ッ、ううう……ッ、そんな……ッ」

『こ……ッ、こ……ッ、こうして……ッ、こうして……ッ、御義父様おとうサマのメスイヌ奴隷になつたというのに……、奴隷契約を交わしたというのに……ッ、それでも、夫との

……、庸介サンとの関係、結婚生活を続けなければ、ならないんだわ……ッ』

『だって……ッ、だって……ッ、それが、御義父様おとうサマ……ッ、御主人様の命令なんですもの……ッ』

ぐずぐずッ。

めぐみは鼻を鳴らした。

『で……ッ、で……ッ、でもでももおお……ッ』

セーラー服の新妻は胸の奥で懊惱し、悲嘆の声を上げた。

『わ……ッ、わ……ッ、わたシは……ッ、わたちは……ッ、御義父様……、御義父様だけの奴隷になりたいのに……ッ。もう……ッ、わたちは……ッ、わたシのすべては……ッ、御義父様だけの所有物だというのに……ッ』

ぽろぽろッ。ぽろぽろッ。

奴隷としての恋情に紅涙を絞る、息子の嫁に、義介が仁王立ちになる。

「よく言えたたね。しかも、ここ数日、うまくやっているようじゃないか？」

「は……ッ、は……ッ、はヒ……ッ」

めぐみは肩を落としてうなずくしかなかった。

相思相愛の恋愛の果てに結ばれた、結ばれたハズの夫をだまし、そしてこれからもだまし続けなければならない、後ろめたさにめぐみも心苦しさを感じずにはおられない。

『ゆ……ッ、ゆ……ッ、許して……ッ、庸介サン……ッ』

そう言つて謝罪することすら出来ない申し訳なきにめぐみは涙を流すしかなかった。ふふんッ。

悲劇の主人公さながらに悲嘆に暮れる、息子の嫁を義介が鼻先で笑う。

「それじゃあ、御褒美だよ」



「それじゃあ、もう一度、誓いなさい」

「は……ッ、はあ……ッ、はヒ……ッ」

めぐみは、目の前にそそり立つ義父の男根に魅入られたように見つめたまま、うなずく。そして夫への罪悪感よりも、服従の歓喜と被虐への希求に胸高鳴らせ、興奮に喉をつつかえつつかえさせながら、口を開く。

「わ……ッ、わ……ッ、わたし、めぐみは……ッ、夫、庸介を大切に……ッ、ないがしろにしません……ッ。夫を……ッ、庸介サンをぞんざいに扱い……ッ、哀しませたり……ッ、不幸にしたなら……ッ、売り飛ばされても、か……ッ、か……ッ、構いません……ッ」

「よおし、よし」

息子の嫁の宣誓に満足げにうなずくと義介は、首輪の引き綱リドを引いて、息子の嫁を池のすぐそばの芝生の上で仰向け寝転ばし、両足を広げさせる。

「ああう……ッ、御義父様おとうサマ ああ……ッ♡♡」

そして、口の中を粘っこい唾液でネットつかせ、自分を求める、息子の嫁の肛門に義介は栓プラグを突き入れる。

ぐちゅッ。

「あぐう……ッ！」

便意に責め立てられている排泄器官に異物を挿入されて、その巨大な乳房をぶるぶる、プルプル震わせて、息子の嫁が喘ぐのを見ながら、義介は栓の内側の傘を開き、ばちんッ。

「あぐうう……ッ！」

肛門栓を息子の嫁にしつかりと取りつける。

そして、その肛門栓を動かしながら、ぐりぐりッ、ぐりぐりッ。

「おごおお……ッ！」

息子の嫁に笑いかける。

「これで、粗相しなくてすむからね、安心しなさい♡」

「はあ……ッ、はあ……ッツ、はヒ……ッ♡」

めぐみは、今施された肛門栓がはずされない限り、自分を苦しめている便意が続くことを教えられて、うなずくしかなかった。

そして気絶しかけながらも微笑み、

につ、につ、にこッ。

「ああ……ッ、あはあ……ッッ、ありがとう……ッ、ありがとうございます……ッ、御義父様……ッッ♡」

礼を言う。

それは心の底からの、本心からの謝礼だった。

たとえ、この先どんなに苛烈な便意がめぐみを苛み、苦しめようとも、今、この一時だけは義父の、義父の男根を挿入され、ヨガリ狂うコトが出来るのだ。

感謝せずにはおれなかつた。

「ふふッ、良い嫁だ。良い嫁だ。オマエは本当に良い嫁だね」

まるで馬鹿にするかのようにそう言いながら、義介はまんぐり返しになっている息子の嫁を、その濃ゆい愛液に粘つく膣腔を、一気にブッコ抜く。

どぶどぶッ。

「あうんんん……ッ♡♡♡」

(ああんん……ッ、御義父様の……ッ、御義父様のチンポおお……ッ♡♡♡ 御義父様のチンポ、ステキいい……ッ♡♡♡)

挿入された途端、めぐみの膣腔はワナナキ、フルエ、夥しい愛液を、秘裂の前後に

アフレさせ、流しながら、肉襞ニクヒダという肉襞ニクヒダを立ち上がらせて、ねちよつきナガラ、義父の肉棒にからみつき、しがみついた。

ぐちゃぐちゃよちよち。

めぐみは自分の子宮口がヒラキ、その奥、子宮そのものが降りてきているのが、自覚出来た。

(あああ……ッ、わたちの……ッ、わたちの膣腔マ〇〇コ……ッ、子宮……ッ、子袋が……ッ、御義父様の肉棒チンポが……ッ、精液……ッ、チンポ汁チル……ッ、が欲しがってイル……ッ、欲しい、欲しヒと哭ないてイル……ッ♡♡)

ぶるぶるッ。がたがたッ。

(モ……ッ、もう……ッ、わたしは……ッ、ダメ……ッ♡　ダメなんだわ……ッ♡♡　わたちの気持ちは……ッ、理性はどうであれ……ッ、わたちの……ッ、わたちの……ッ、肉体カラダ……ッ、わたちの膣腔マ〇〇コは……ッ、御義父様の……ッ、御義父様の、肉棒チンポの所有物モノ……ッ♡♡)

わなわなッ。ぶるぶるッ。

(わ……ッ、わたちの……ッ、わたちの膣腔マ〇〇コが……ッ、御義父様の、肉棒チンポが……ッ、精液が……ッ、チンポ汁が……ッ、欲しヒ……ッ、欲ちひと哭ないてイル……ッ♡♡)

(モ…………ッ、絶対に…………ッ、絶対に…………ッ、わたしは…………ッ、わたしの…………ッ、わた  
ちの…………ッ、肉体<sup>カラダ</sup>…………ッ、わたしの腔腔<sup>マ〇コ</sup>は…………ッ、御義父様<sup>おとうサマ</sup>の…………、この御義父様<sup>おとうサマ</sup>の  
この肉棒<sup>チンポ</sup>から逃げ出すコトは…………ッ、離れるコトはできないんだわ…………ッ♡♡)  
ぶるぶるッ。がたがたッ。

(わたしの…………ッ、わたしの…………ッ、肉体<sup>カラダ</sup>がそういつている…………ッ♡ わたしの腔腔<sup>マ〇コ</sup>  
がそう叫んでいる…………ッ♡♡)

(わたしの…………ッ、肉体<sup>カラダ</sup>は…………、わたしの腔腔<sup>マ〇コ</sup>は…………ッ、わたしのすべては…………ッ、  
御義父様<sup>おとうサマ</sup>の…………ッ、御義父様<sup>おとうサマ</sup>の…………ッ、肉棒<sup>チンポ</sup>の…………ッ、この肉棒<sup>チンポ</sup>の…………ッ、所有物で  
あり…………、従属物…………ッ、ドレイなんだわ…………ッ♡♡)  
ぞくぞくッ。

(そ…………ッ、その定め…………ッ、運命から…………ッ、絶対に…………ッ、絶対に…………ッ、逆ら  
うことも抜け出すことも出来ないんだわ…………ッ♡♡)  
ぞくぞくッ。

(だって…………ッ、だって…………ッ)  
ぞくぞく。

(わたしが…………ッ、わたしの…………ッ、わたしの腔腔<sup>マ〇コ</sup>がそのコトを望んでいる…………ッ♡





御義父様のおとうさまの……、御義父様のチンポ奴隷にシてほしい……ッ、御義父様のチンポ奴隷でありたいと望み、願っているんですもの……ッ♡♡♡

ぞくぞくッ。

歪みまくった慕情、倒錯しきった快感が、結婚したばかりの新妻の肉体から精神、魂までを蝕み、蕩かしていく――。

きゅぽきゅぽッ。

がくんがくんッ。

「ああん……ッ、御義父様ああ……ッ♡♡」

つい先ほどまで夫と繋がり、愛を呼びあい、確かめあつたハズの新妻がその同じ口で、その夫の父親、義父を、その肉棒を声高らかに呼び、求める。

「御義父様のチンポ、ステキいいヒ……ッ♡♡」

ぞくぞくッ。

しかも、その乱れっぷり、悶えようは夫の時以上だった。

もはやめぐみの脳裏には、優しい夫、相思相愛の果てに結ばれた庸介の面影はない。今のめぐみにあるのは、自分の膣腔に突き込まれ、粘膜をこねくり、えぐってくれている義父の肉棒だけだった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

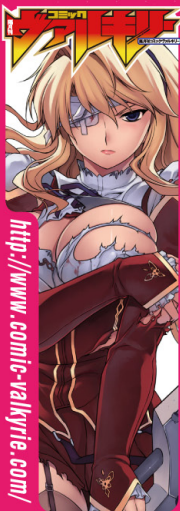
©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!